

ミニチュア椅子形フォトスタンドの作り方

千葉市緑区 渋谷 雄二

私のつたないネイチャークラフト作品の中から杉板、小枝や木の実などの自然物を使ったミニチュア椅子形フォトスタンドの作り方を紹介させていただきます。皆様に自然の恵みを感じていただければ幸いです。

☆用意する物

○材料

- 小枝 径15mm 長さ 6cm 4本 (脚用) (片端部1cmを径10mmに加工)
径12mm 長さ10cm 2本 背もたれ用 (両端部1cmを径6mmに加工)
径20mm 長さ 6cm 1本 (頭受け用) (2箇所6mm深さ1cmの穴)
径 5mm 長さ10cm 3~5本 背もたれの補助材 (適当にカットして使用)
- 杉板 縦10cm×横9cm 厚さ 13mm 1枚 腰掛け板用
(座面に2箇所背もたれ用の径6mmの穴、裏面に4箇所脚用の径10mmの穴)
- 自然材料 マテバシイのドングリ、ハンノキ・メタセコイア・ヒノキ・ナンテンの実、唐辛子、スターチス (市販の花)、小枝の輪切り等



○用具等

ノコギリ、ナイフ、電動ドリル、ドリルの刃 (5mm・10mm)、剪定バサミ、金槌、木工ボンド、グルーガンとステック



☆作り方・・・写真を参照して下さい。

①腰掛け用の杉板に10mmの穴を4箇所開けて脚を取り付ける。(木工ボンド使用)



②腰掛け用の板に6mmの穴を2箇所開けて背もたれ材を取付ける。(木工ボンド使用)



③頭受け材に6mmの穴を2箇所開けて背もたれ材を取付ける。(木工ボンド使用)



④背もたれ材にグルーガンを使用して自由な発想で補助材及び自然材料を装飾すれば完成。



ソテツにやって来た南国のシジミチョウ

ソテツはイチョウと並んで最も原始的な植物で、恐竜時代に栄え、化石も多く見ついているとのこと。ソテツの自生の北限は宮崎県で、まさに南国の木です。数年前に奄美大島に行ったとき、山いっばいにソテツの群落があり、感動した覚えがあります。ソテツはサイカシンという成分があり有毒ですが、デンプンが多いことから、水にさらして救荒植物として食用にしていたとのことでした。タネ入りの「蘇鉄味噌」というのも売られていました。

ソテツは、公園、庭、学校などに植えられており、特に湾岸地域では馴染み深い木です。普通すぎて、あまり気にかけてなかったのですが、昨年「気になる木」になりました。理由は、昨年ソテツに、南国のチョウであるクロマダラソテツシジミがやって来たからです。残念ながら、昨年は知ったのが遅く、見ることはできませんでした。今年はなんとしても「クロマダラソテツシジミを拝みたい」と、ソテツを見かけてはチョウを探すようになりました。クロマダラソテツシジミは、熱帯、亜熱帯のチョウのため、本州では冬は越すことはできません。強い風によって、南方からやってくるのでしょうか。

初めて見たソテツの花に感動！

7月、ソテツの真ん中から大きなバナナのようなものがすーっと伸びていました。それには小孢子葉というものが沢山ついており、その裏側にブツブツしたものがびっしりついていました。それが花とはとても思えなかったのですが、調べてみると雄花の葯でした。ソテツは雌雄別株です。雌株を見てみると、雄株とは違い、真ん中がこんもりとなっています。雌花をよく見るために近づくと、トゲがこれでもかと襲ってきました。トゲと格闘しながら、孢子葉についた胚珠を見つけることができました。見た目はふわふわの羽のようですが、トゲの要塞で大切な胚珠を守っているのですね。



ソテツ 雄花



ソテツ雌花 丸いのは胚珠

クロマダラソテツシジミがやって来た！

9月、千葉市中央区～千葉市美浜区～習志野市茜浜の湾岸地域のソテツで念願のクロマダラソテツシジミに会うことができました。市川市の大町自然観察園のソテツにもいましたので、内陸にも進出しているようです。開放的な明るい場所に生えるソテツを好むようで、暗い場所のソテツには来ていませんでした。幼虫はソテツの新芽を食べ、若齢のときは赤っぽく、だんだん緑色になりアリを伴うようになるようです。多いときは、100頭以上のチョウがソテツやその周りの花をひらひらひらひら・・・。夢のような光景にうっとり！聞いた話によると、チョウの幼虫や蛹を根こそぎ持ち帰る人がいるとのこと。アカボシゴマダラは人が放したものが増えて、特定外来生物に指定されていますが、飼育したチョウは、絶対に野外には放さないでほしいものです。 田島正子(船橋市)



クロマダラソテツシジミ交尾

ウスタビガ：晩秋の林の片隅で、緑の繭の物語①

<身近なのに遠い存在>

生き物大好きの人の中でムシを追いかけている人のことを「ムシ屋」と呼んでいます。そしてその中で蛾を追いかけている人を「蛾屋」又は「蛾屋さん」と呼んでいます。私は、「蛾屋さん」ではありません（あえて例えるなら「ゲンさん」です）が、ここ数年ヤマユガの仲間を追いかけています。幼虫、繭、成虫は、いつも身近にいて私の幼なじみでありながら羽化や繭をつくる様子を見たことがないことに気が付きました。そこで、幼虫や繭を採集して観察することにしました。

<鮮やかな緑の繭>



冬枯れの林に残された鮮やかな緑の繭、よく見るととても精巧につくられていることがわかります。どのように繭を作るのか、羽化はどのように行われるのか想像が膨らみます。

<羽化の観察に挑戦/2018年～2019年>



10月下旬に繭を採集、羽化を楽しみに毎日、繭の中の音を聞いたりして中の様子を確認していましたが羽化することなく年を越しました。そして3月、繭から大きなハチ（コンボウアメバチ）がでてきました。

<羽化観察成功/2019年11月18日>



午後3時ごろ、繭の中からゴソゴソと音が聞こえはじめ、5時に繭からの脱出が始まりました。

6時30分、翅が完全に伸び切りました。開翅張約110ミリの立派なメスでした。

<繭づくりの観察に挑戦/2020年>



4月下旬、コナラの木に若齢幼虫を発見、「繭づくり、羽化を観察できるかも？」と考え、飼育を開始。葉をもりもり食べて大きくなりましたが、5月下旬、幼虫の体からたくさんウジ虫がでてきました。

ヤマユガの仲間は、大きくて、シタバタと羽ばたくことから一般的に嫌われ者ですが、その生活史は、知れば知るほど興味深いものがあります。これからも蛾の魅力を見つける旅を続けたいと思います。

西野 孝法（千葉市）

<晩秋の林のウスタビガ：千葉市>



メスです。繭にぶら下がリオスを待ちます。



裏から失礼します、偉大な「お尻」です！



オスです、メスに誘われて飛んできました



交尾中です、左がメス、右がオスです

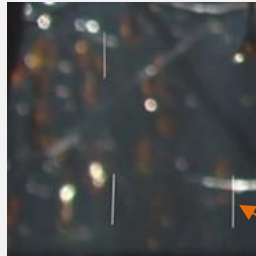
ウスタビガ：晩秋の林の片隅で、緑の繭の物語②

夜行性の蛾は、よく街灯に飛んできます。「どんな蛾が来ているのかな？」などと思いながら街灯の周りをチェックしてしまいます。蛾は恥ずかしがり屋で、日中は葉の裏などに隠れています。見つけ出そうと雑木林の斜面を登ったり下ったりしながら木を一本一本丁寧に探しますがめったに出会うことがありません。このような状況で疲れを癒してくれるのが季節の移ろいによって変化する雑木林の様子です。特に秋は、クヌギコナラの紅葉、キノコ、木の実の美しさ、霜/氷に見惚れています。

<生き物探しの合間に会った雑木林の様子/生き物探しを中断して暫く見惚れています>



葉の半分だけが紅葉したコナラの葉。葉の紅白歌合戦は、現在のところ引き分けのようです。



雑木林に陽があたり始めると、葉や枝先の氷が水滴となって落ち始めます。その滴は陽の光で輝きながら落ちていきます。それは、雑木林という小さな宇宙の「流れ星」のようでした。
陽の光を浴びて輝きながら落ちていく滴

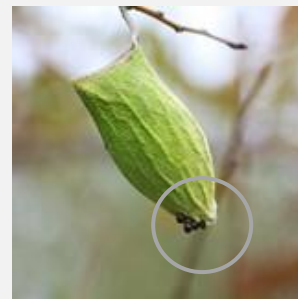
秋が深まり、葉がすっかり落ちると緑の繭が目立つようになります。「なんだ、ここにもあったのか、気がつかなかったなあ〜」などと独り言を言いながら繭探しを続けます。慣れてくると無事に羽化できたもの、羽化できなかったものを見分けることが出来るようになりました。羽化できなかった繭を見た後で、卵が付いている繭をみると何故か「ホッ！」と安心します。



羽化できなかった繭



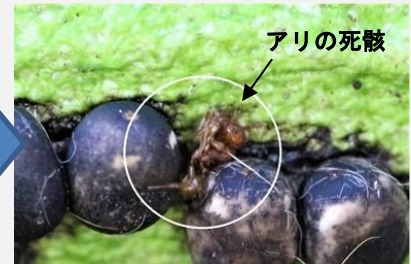
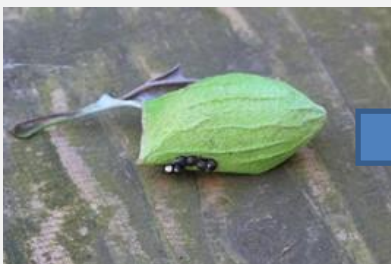
羽化した繭



卵のついた繭

卵がついた繭を見ると、卵と卵の間に異物がありました。繭を枝から切り取って近くで見ると、その異物は、蟻（アリ）の死骸でした。ウスタビガの卵と蟻、どのような出来事があったのでしょうか？想像してみました。

<緑の繭の物語/アリの悲劇？>



卵を狙ってウスタビガの産卵に忍び込んだアリ。卵を探ろうとしますが、ビクともしません。そのうちに卵についた粘着物に身動きが取れなくなり、もがいているうちに、他の卵と共に塗りこめられて絶命！・・・といったところでしょうか？

西野 孝法（千葉市）

鳥見の楽しみ

私は15年ほど前から鳥見を続けている。その頃、自分が実際にやり続けることとしてアメリカのロッキーなどで活動しているレインジャーのようなことをしたいと思っていた。だが日本で現実的にやれることで考えて、それ以来鳥に関心を持ち続けている。

鳥見は家にいてもできる。まだ薄暗いうちからジョウビタキがヒッヒッと鳴き始める。そのうちヒヨドリが盛んに鳴く。1日のうちで一番早く鳴き始めるのは、ハシブトガラスだろう。まだ真っ暗なうちから鳴き交わす。日中は目当ての花や実があると庭の木々にとまって盛んに花や実をつついたり、蜜を舐めたり、枝に潜んでいる虫の幼虫などをついばんでいる。そんなにたくさんいるのかと思うくらい、虫は上手に枝や地面に潜んで成虫になるまでの時期を過ごしているようだ。ほとんど一年中枝をつついているのがコゲラだ。コゲラが花や実をついばんでいるのを見たことがない。

ちょっと足を伸ばせば、いろいろな野鳥たちに逢うことができる。

春なら、野鳥が巣作りをしていたり、雛が盛んに餌をねだっていることも多い。そういう光景は何年経っても忘れずに、今見たばかりのようにはっきりと思い出することができる。田んぼの方に行けば、田植えをしているコンバインの周りを取り囲むようにダイサギやコサギが付いて回っている。

春や秋の渡りのシーズンには、普段見られないシギや千鳥が干潟や田んぼなどに突然現れ、夢中になって餌をついばんでいるのを見ることが出来る。そして、普段聞くことができないような野鳥の鳴き声を聞けるのもこの頃である。また、タカ類も小さな群れを作って東南アジアなど南の暖かい地域に帰っていく。野鳥たちは、「これから過ごしやすい季節になりますよ」「厳しい季節がきますよ」と教えてくれているようである。



ルリビタキ 180202

飛び立ってしまう。ちょっとその気になればいろいろな鳥を観察できる。これからが冬本番である。コロナ禍も今は沈静化しており、この冬はいろいろな鳥に逢いに行けそうだ。

野田市 西池 光



コサギ 110202



カルガモ親子 160519

冬は鳥見のベストシーズン。何しろ鳥を見つけやすい。あまり苦労せずに発見でき、観察をさせてくれる。ルリビタキ、ジョウビタキ、マヒワ、ベニマシコ、カモ類…。

林や草原、河原、水面などに見つける青や黄色、赤や緑、そして白の小さい塊。この塊は絶えずチョコチョコと動き回ることが多い。カメラを向けようものなら、さっと逃げてしまう。時には50メートル位離れていても

赤道

赤道（あかみち あかどう）の言葉を初めて聞いたのは「大草いきものの里」がオープンしてしばらくしてからのこと。いきものの里の中の道をオートバイで走る人がいた。東金街道から千城台への通り抜けに使用している様子。「オートバイで通っていいの？」と聞いた時「あの道はあかどうだから」と保全課の職員。赤道（あかみち）とは公図上で地番が記載されていない土地で所有者がなく道路であった土地の事を言うのだそう。国有地で公図に赤色で着色されていることから「あかみち」「里道」とも言うそうだ。

コロナ禍にあって「玄関開けたら 10 分で里山」に住む私は天気と気分次第で家の近くを歩き回っている。一昨年の台風で一層荒れ果てた近くの杉林が伐採された。杉を運び終わった空き地にはご多分に漏れずソーラーパネルが設置された。ソーラー設置場所（元杉林）の北側と隣地畑との間に東西にのびる幅 2m ぐらい空き地が現れた。そこから東に 500m ほどの所に今度は住宅が新築された。その家の南側にも杉林との間に空間がある。ちょうど居合わせた工事関係の人？に「ここはあかどう？」と聞いたら「はい、あかみちです」の答え。ソーラーパネルの北側と住宅の南側が一直線に繋がった！今まで草に覆われていた空間に昔の道が現れたことに興奮してしまった。少し前の時代にこの道を歩いていた人がいたことを想像するだけで楽しい。農家から田んぼに下って行く道、里と里を繋いでいた林の中の道が我が家の近くに何本もあった。イチリンソウを見たい時はこの道、もしかしたらトラツグミに会えるかもしれないのはこっちの林の道と季節を楽しんでいた道の多くが廃道となってしまった。車社会だから時代の流れで仕方がないが道好きな者としては残念。そんなこともあって古い道が目の前に現れたのは嬉しいことだった。

千葉市 芳我めぐみ

赤道かも（未確認：伊藤）



この子の父親は？ 鳥類のつがい外父性

鳥類の繁殖、子育ては92%が一夫一妻で夫婦仲の良い例えにもなっています。哺乳類では最強の雄が群れの雌を独占する一夫多妻が多いのと対照的です。

しかし、近年の遺伝子解析による親子関係の研究によると、巣の中の雛にはつがい外の雄の遺伝子を持つものが含まれているケースがあり、調べられた鳥類の約75%の種で確認されていて、その割合は、雛の約10%にもなると言うのです。人間であれば浮気、不倫の言葉が使われるでしょうが、これには



人間としての倫理、道徳観などが加味された感情が加わるので、鳥類の生態を理解するには不向きであり、研究者はつがい外父性と言うのだそうです。

これは我孫子の鳥の博物館が開いている公開講座の中で紹介された話題です。講師は山階鳥類研究所の油田照秋氏でした。写真のツバメもつがい外父性の研究はとても多く、やはり5-20%ぐらいでつがい外父性の子が混じっていることが多いようです。

引き続き油田さんの講座から主旨を引用すると

つがい外父性の行動は鳥類の進化の中で何らかの形で個体の適応度(繁殖成功率など)に貢献すると思われる。仮説は色々ある中で「確実な受精により不妊を避けているだろう」の説に着目し、この仮説を数値的に裏付けられないかシジュウカラを使って野外実験をした。シジュウカラは巣箱を利用するので、親子のDNAを採取し易い事と同一のペアが年間複数回の繁殖を繰り返すので、この研究に好都合だった。

実験地は北海道苫小牧の北大演習林、ここに300個の巣箱を設置し、営巣したつがいの中から15ペアを選び、生まれた卵を全て抜き取って人造の偽卵と差し替え抱卵させた。通常の抱卵機期間を過ぎても当然孵化しないので実験ペアは巣を放棄して別の巣で2回目の繁殖に入ったが、今度は卵の入れ替えずに孵化させた。

1回目と2回目のつがい外父性の割合を見ると2回目の方が増加していた。実験ペアと同時期に繁殖した対象ペアにおいては2回ともつがい外父性の割合に大きな変化がなかった。

これは最初の繁殖失敗を配偶の相性による不妊と認識した雌親がつがい外の交尾を増やした結果と言える。

以上で引用は終わりですが、興味深い話ではありませんか。(巣箱の中の巣立ち前の様子 油田照秋氏提供の写真です)

出来れば皆さんにも本人から詳しく聞いてもらいたいので総会での講演会などをご検討願えないでしょうか



佐倉市 坂本 文雄